

四宮隨筆

全

特
1曾5
691



是

も保てなすへ
ふみ川に橋をたぬ
るこし

蔵書

玉



一 括痛にさすやのそを白砂糖にすり
ごころを括みぬりなぬとけりか
一 括りしは懐もなげ

一 目で己の糸の絡糸にやうか
てんあふにちちまふりけり
なすをちしてす
一 ちんじのちんじのちんじとす
切るとちんじ

一拾圓の内又二文の子に弦をいひます。
曇りし中、曇りしとらりしし、す回りの内、
物水を入る所のさ、いひて、海物。

一、子れきみと和、あらまぬ、はけ、
うらふと入けて、あ、

一、竹と、黄、り、と、地、和、と、白、竹、と、ま、
い、水、と、黄、り、と、長、き、も、又、い、ま、の、
黄、り、と、う、ら、り、

一、條の、は、く、ら、る、ち、は、れ、ま、も、湯、し
の、こ、ま、よ、あ、ら、り、

卯未亥

子辰申

丑巳酉

寅午戌

天気日

海日

あ、ら、ん、と、い、は、

あ、ら、お、ま、

昨日は、雨、降、り、子、辰、申、卯、の、海、日、す

毎日に天の氣を記し印末を玄刻に記す

一 龍木仙をまぶと^{龍木}記す^{龍木}しうひつり
兒

七龍の子ととりこし

一 ずこつすなふき申しるこたふり
佛のさすなふきとらしむしとせむ

あはれにふりこしむのこし

佛のたふきこしむびこしむよふ

すしむりかろし

すしむりかろし

馬のりらと射こし

云々

一流瀧馬

一 ちけ紀伊を海にす國を併てあはれを城を
ふぬ氏の女を容れ給ひあつりしと浮り紀伊一とせえて
こし望同ありしと申す申す申す申す申す
けむかろし男いぬらふと申す申す申す

老嫗

一 海也 淫ら大弼を政の家士俸受り使して道
 の先をゆく身大始ありして不勤の政の
 名の中より身を切りしはもとより 是れ其
 才と強てをこわり 斬之て大光忽とて暗を
 かくりて海に身をまかせしは 石佛
 の心より血流おちては 斬たれりアトアリ
 ともわりゆりて 政しからぬ心 親き友あり
 かりしは 身をまかせしは 血の流るるは
 心まかせられしは 母かけられし 海を
 秀吉の社に遠く 秀吉の刀とる多し一

ありしは海軍もまた 作らばくすア
 つくと云ては 子ありしは 夫とつけし 秘を

一 氏政ノ世ニ至テ卒有餘ノ遍参僧関東ニ赴ク時相
 助小田原ノ駈亭ニ宿ス制ナヲ見テ嘆息シテ茶
 家ニ末二十リ可亡ノ端顯シタリト云目代此言
 ヲ聞テ往テ可奉行ニ告ク可奉行奇之テ
 彼僧ノ所ニ使リ以テ可申談事候間御苦勞
 ナカラ私宅ニ末臨アト云遣之ケシハ老足道
 二 疫候休息ニテ後参ニテ暮ニ及ニテ見ル町
 奉行出逢テ先辭儀ヲ進茶宗進テ出ニテ後承シ

爾々出立言アリト申ス者、候実ニテ候ヤト問
客僧実ニテ假ト答フ判れ、ケ余非理ノ事候
ヤト問留監ナリ非理ノ事候ハスト答フ其持回
奉行貴僧定テ將識ナレト非理ナリト云レハキ
事昧暗ナレ、吾衛ノ所不辨ニ候願久其道理
ヲ説テ惑心ヲ解シ候ヘカ下イハハ客僧我三十
年此地ヲ過候時、判れケ余ノ面僅ニ五ケ条
ニ候余自見タテ、三十自年ケ条ニ在リ、心明
感アリテ士代心結スル、法云、及ノケ条公方
知ナリトテ、達ナラ者、名ノ明、蔽ハレ感

云、ラ後士代達ケ老多キ由テ法云レ
ケ条、二年ニカ、タリ、改令、頭細、あり、
候、と、取、よ、士、代、法、云、及、ノ、ケ、条、公、方、
テ、賢、名、ニ、カ、ル、事、と、取、レ、よ、ハ、リ、の、是、士、代、
ノ、志、ノ、名、を、こ、え、ろ、れ、ち、り、候、士、代、志、
ツ、ク、ま、お、新、し、く、な、れ、ば、共、ニ、國、ヲ、守、り、
ツ、ク、ま、お、新、し、く、な、れ、ば、共、ニ、國、ヲ、守、り、
ア、フ、シ、タ、リ、ト、申、候、事、の、是、を、ス、ル、水、と、云、
非、テ、後、ハ、自、省、自、戒、ラ、シ、昔、ノ、盛、世、ニ、還、
ル、ヘ、ト、云、所、を、力、ち、み、感、服、ニ、テ、客、僧

去所ノ具ニカキナタリ

九字

陪 兵 闘 者 皆 在 烈 神 前

一 湯の注利くふも入る中へ大まこと一ふ
つめんと入無一のうらまありん

一 石のれこまると所ぐおは^{カメウツリ}燗午の肉と
しりつぢりそつくる石の

等永く詭術もう〜他も進口之
つり詭術にけりし

一 又物注ありしぬ^カ穀ノ字とせしこと

換^カ庚の地とてけりぬか〜所と辨せぬ
法よく〜あり〜きこ〜の仲つたは^カ紙の
粉ととりせし〜きこ〜つ〜
是たのも〜し

一 ^{サテニ}野雀と王統として一はけ〜
ノ紙とそれ〜して山〜あ〜

煉み、煮こがし

石ころりの法

○温性の粉子石灰せんく液をかく水も粉も
極一、又瓶のなかを、しうあもれ、所、油
の方、生善を細くあつ、多そおと煮、湯を
流し、ゆき、ゆ、湯を流

一 檜シヤヒの実とせしほころ、後て流す、粉に
く、寒、月も、そ、凍れ、こ、水、氷、も、凍、り、り、
一大、井、淘、送、い、こ、通、蒸、て、ほ、と、去、り、大、麻

子、三、ま、つ、な、少、と、後、こ、通、し、り、て、口、つ、れ、
皮、と、去、二、色、能、搗、條、の、も、く、み、の、曾、
油、次、より、な、ま、と、煮、て、宿、の、時、に、れ、お、
ゆ、も、煮、晒、し、乾、し、と、粉、み、は、く、し、と、
飽、ら、し、と、食、し、と、一、切、介、の、物、と、く、な、る、
始、つ、な、食、ま、れ、七、日、の、る、他、さ、り、と、又、七、日、を、
あ、く、絶、然、と、一、日、も、く、と、煮、又、食、ま、れ、
二、日、口、く、煮、又、食、ま、れ、二、三、日、口、く、煮、
し、ゆ、口、湯、麻、子、の、湯、と、飲、し、り、煮、
の、も、く、食、ま、し、と、お、り、く、冬、煮、子、を、粉、

して湯にせんしきゆへ移してしき
この色の如ふしそへ大使にりりえ
言ふことして言ふことして言ふことして
歌をしく懸けしを耳にりりりと
又くしり

一千里花の故 荊花 防風 草烏頭

細辛 藁本 石細木 草履 草鞋
の内は他らと認めれい何程道と歩むて
よ外るう

一山はれと名さしと ^{コラユハ} 思ふに ^{ヒメ} 松葉ふしと

併に入き

一 ^{スレセクサ} 旅将軍より入る者けとれて ^{ヒメ} 山にぬき
池 ^{スレセクサ} せら ^{スレセクサ} 池 ^{スレセクサ} せら ^{スレセクサ} 池 ^{スレセクサ} せら

一 ^{ヒメ} 蚕と云れ ^{ヒメ} 薄因式 ^{ヒメ} 兵 ^{ヒメ} 下 ^{ヒメ} 参
と ^{ヒメ} 又 ^{ヒメ} 風 ^{ヒメ} と ^{ヒメ} 舞 ^{ヒメ} 子 ^{ヒメ} 年 ^{ヒメ} 牛 ^{ヒメ} の ^{ヒメ} 衣 ^{ヒメ} と
盤 ^{ヒメ} 石 ^{ヒメ} の ^{ヒメ} 袂 ^{ヒメ} 入 ^{ヒメ} 糸 ^{ヒメ} 一 ^{ヒメ} つ ^{ヒメ} ら ^{ヒメ} ぬ ^{ヒメ} り

てしをとりりりり又一日返宿 秦荒 ジンゲク 二也
粉にしてなれ又乱るると大かて香と持て
し〜 煙がぬれと〜 多く煮つ又〜 けしき
せし〜 湯をほめて煮ゆ

一 以虱ニ鳥ハとよりのみ 漬物なるとは

一 乾金ニ雄黄と蒜とをとりませぬト
ニニニク
山椒、梅、中、ま〜 又〜 ぬ〜 ち〜 行
忽〜

一 梅木の葉とを糸の産香一丸 蓮肉レンニク
人参ニンジント 右ニ味粉として水ととまき
接穂のりぎりやぬれ〜 けけ〜 ち〜 又
さ〜 本の切口ぬり〜

一 角と煮法 地骨皮 塩硝 柘の枝

右之をとぎ入水ミヅゆき 煎出〜 角と
ほりとり〜 初〜 細〜 ち〜 ぼ〜 ち〜
甘汁水と煮ちるをの〜

一 諸君に申すに生薬のけりしりすなり
一 凡そに雄雄^{ナク}のり^{ナク}雄^{ナク}を^{ナク}鑿^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}て
か^{ナク}し^{ナク}り^{ナク}雄^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}宜^{ナク}と^{ナク}記^{ナク}は^{ナク}る^{ナク}
し^{ナク}に^{ナク}記^{ナク}は^{ナク}る^{ナク}

一 乾乾の皮^{ナク}の^{ナク}は^{ナク}と^{ナク}入^{ナク}生^{ナク}凍^{ナク}の^{ナク}皮^{ナク}
疏^{ナク}を^{ナク}の^{ナク}り^{ナク}し^{ナク}る^{ナク}
一 皂^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}梳^{ナク}子^{ナク}と^{ナク}洗^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}洗^{ナク}を^{ナク}
洗^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}洗^{ナク}を^{ナク}

△ 一 七 麩と石炭を^{ナク}ま^{ナク}じ^{ナク}日^{ナク}を^{ナク}干^{ナク}す^{ナク}
し^{ナク}て^{ナク}水^{ナク}を^{ナク}し^{ナク}移^{ナク}を^{ナク}乾^{ナク}油^{ナク}の^{ナク}乾^{ナク}
し^{ナク}て^{ナク}油^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}油^{ナク}を^{ナク}
一 乾^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}乾^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}乾^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}乾^{ナク}を^{ナク}
一 背^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}背^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}背^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}背^{ナク}を^{ナク}
入^{ナク}す^{ナク}に^{ナク}入^{ナク}す^{ナク}に^{ナク}入^{ナク}す^{ナク}に^{ナク}入^{ナク}す^{ナク}
能^{ナク}く^{ナク}能^{ナク}く^{ナク}能^{ナク}く^{ナク}能^{ナク}く^{ナク}能^{ナク}く^{ナク}
一 小豆^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}小豆^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}小豆^{ナク}を^{ナク}と^{ナク}小豆^{ナク}を^{ナク}

一 殿風如糸 茗荷 明礬石 硫黄

丹 無四色と布の色はあらず

一 ダイころのボリにニテ、又字の書火の
ウツタ時を火ウツン也

一 後、畫と取法

唯黄 霜碯砂 二色研膠

水（こき）畫し、乾く時火中一後と
一斤、曉丸（こ）磨（カク）丸

人魚作（ハ）付

一 糸、麵と取法、切大きく、水
と入、細（カク）糸と一、通（カク）金（カク）とめん、
一、めん、又、又、又、又、又、又、又、又、
大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、
二十日、程、程、程、程、程、程、程、程、
水、水、水、水、水、水、水、水、水、水、

能くくえぬなり

一人前の眼より走らうとせよ六の烟粉こいと

一 小刀を丁に改或は梳刃にせりりす嵐こいを
あらしこきとらしてに中す月程を能く
麻は解ゆみと申すなり

石に文字をぬ法

一 煙管キセルのやにとれ玉にすりませけるを

せしうけ 投入を六十日とて後れか
さう洗いして

一 襦の突とせぬ

一 白布に血けりりに生着とをきて上を
くくくあしし ぬれ心とぬらぬ

石と煮る法

一 明葱アサツキと搗爛りて水の中へ漬けて
入るを煮るなり

湯と梅を煮るとさうし石粉と多量に
の中へ飛出さず水と煮るとさうし
るし少ぬちのちと破るる

一 胎製し事

こゝに胎ヲ湯セシニ赤ヨクサ
ミソヨクスリ自分ノ心ヨキホト入カキ
マワシカニ用

右切能汁一俾気ノ茶

一 小茴香 一 行

右古酒を并し以うこ引る 當り
用

右才一ムクリニヨシ

一 腹痛之茶

厚朴 當歸 良姜 各ホ分

右水一盃半ヲ二盃せん用

但一フクニホ下位

をいふとていふ石わらふまはる心
に飛出さず水とをるをいふ
おちのちをく破る

中

此ヲ湯セシニテテヨク煮タニセ茶
ヨクスリ自分ノ心ヨキホト入カキ
カニ用

此一睨気ノ茶

一行

此を并リ以テ引とて茶ニ

クリニヨシ

茶

當亭 良差 各ホ分

盆ボヲ二盆せん用

フクニホホト位

りのありまう
じんのわのわのわ

右後痛約痛肩痛用妙也

人參 三職糸

巨孫子 破古紙 肉桂 白朮 茯苓

七後金子 危孫子 山茱 牛膝 黃精

挖麻子 苞杞子 人參

右亦分練密

一 古虫ノ妙茶

エニンマウノ キリン四 耳ヤ名ホウ

右粉ニニテハイハニツ取ワクイ子リセセ
コニハリ

△古今之武將先人天下ヲ帥ルニテ以シ民從之
則世久之暴ヲ以シ民從之則世危之是故二
人ヲ利スル者ハ天是ニ福シ人殺者天是ニ禍
ト云リ

一 續續
ニウケン
トキテキクヨラヨビハ流ラリケル深ト

よむし物と云ふりて擇り物と云ふり

一 三毛中と云ふ所みれたのまは髪と云ふ事ありかゝる扱へ
るらうすのまを中と云ふは外に入りてはあやう

一 後すしの所粥み是之粒入き金まはしりしは好ま
れ心はもとの時の母子は中し所の是と粥み入
是伊豆の是と之粒の是と象うて是之粒今
け事世と云ふ布とて今道よはるまうしり

一 東ちくのまは作をわては家あうまをふれあり
わりりまはくとあけはしりまをさうまをさうま
事と云ふりまをさうまをさうまをさうま

一 くのけまよりて馬のおはれありまは系福園
くは他人の系は日草をまを和名を
ふれの馬麻を扱をいふ所の馬を扱を扱を
の馬御目^{ミメ}を扱はく所の馬まはは所の馬と云ふ
いふまを扱をいふまをいふまをいふま

一 且世の二字の多 且里根之世は女根之且山
篇よ扱をいふまをいふまをいふまをいふま
けは池と云ふ字人根の扱と云ふは且扱列
多く字れよまをいふ字也は大方はよまをいふ

湯乙湯乙之比乙字ヨ果み出ししと云る

マケスリノ妙茶

一 毫ノマケハイリ水ニテ子リツケテヨク在者
若マケハイニセし時ハ丸ノハイニテヨク

一 ありはりあまのこを考りよ水煮の
けねき平しせん入考ねいりり
つりまめすり

後列金比昂羅人程況の五神祈

大己貴命ナリ

亦昔は教大所天竺の金比羅神と云る
是と別系考る此靈化と云ふて別
系考の日吉大明神の神祈と云ふ
いふり人を折金比羅神の云々大己の神ナリ
系考考る系大己貴命と云ふ金比羅と云ふ
の四系考る系ハ係考る何は比と云ふ天神と
文除考考と云ふと云ふ天神と比考と云ふ同

神代より先金毘羅神の四神祈
大己貴命と申す

神風記曰

おんみのしりあけられり

まおんみのしりあけられり神道の流るしそ人心の致也
まおんみのしりあけられり神道の流るしそ人心の致也
礼のハ荒神と申す
やまをともて天神様て流るともいふ

人心の致也
まおんみのしりあけられり神道の流るしそ人心の致也
礼のハ荒神と申す
やまをともて天神様て流るともいふ

小祀

春日 大志 風神 三枝 相堂
大原 道食 因韓神 平野
梅名 神今合

中祀

初年 月次 新嘗 五年大嘗会 加美祭

大祀

踐作 大嘗会

大神奈々々

齋月宮

伊勢大御名のみま

神院

天武天皇大神奈の
神玉凡てすの孫
詳之玉のく時

右に於て神を西京神と次是を信と云ふ
亀ト志廻れやあるは改亦教亦の式あるは
子孫の神儀の世にありは亦実秘傳の事と
小子れをくまにありは亦多に小子淫に
おが亦安れ海と云くすはこれより一掃再
といつては三姉壇 神カ好壇通好壇 神愛也壇 此等
ら好壇や此の法浄法涌壇口の法浄

教念相との法浄字
不記すも

西京村

彼に神殿 ユキ
神殿 スギ
神殿 神殿
神殿 神殿

此に儀あるは
此法小くして所口と云はれは

淨小く七日戒

血意肉食禁むるの
戒之は必ずしも

二日戒

海元二更
か所好亦

とにこもり次き心してはこれに後智あり
といはれども相おあそはけは信と云ふとき
てる次一まのすてはは所はたこもり
ありて次たといはれよおこりんも
日月の業は法よりすも亦も亦も石浄
法時と云はれ時乃いしぬはるこ又けり

中は男の子らお尻のしししえる服フクと
 服ハ喪服とききて愛憎とほく次々之服フクと
 俗より友天子より喪事ハ服フクと
 喪之儀と知し是を服フクとふ之親族
 の子はこれをも悲コトシテウキヤラむ所の服フクとふとの
 一等親 ○父母の服二年 ナニテ月之内廿日と服とソウ之
或ハ十五日と云々又此ハ心志を
子ハ時ハ失はれり日とありて二年十二月の服と云々
 眼の及之此の服ハおろくク之を死の目と云々
 ○養父母ハ服三月 ウツクハ三月ハ他ハ此ハ其の所ハ其の
就ハ三月ハ其の親の服と云々

○子ハ服三月 ウツクハ三月ハ他ハ此ハ其の所ハ其の
就ハ三月ハ其の親の服と云々
 ○父の服一年 イチネンハ其の親の服と云々
 書ハ其のまハ服と云々 書ハ其のまハ服と云々
 二等級 ○祖母の服三月 ニトウシツノハ其の親の服と云々
 一月 イツケツノハ其の親の服と云々
 叔父 ウヂフハ其の親の服と云々
 服三月 フクニケツノハ其の親の服と云々
 ○兄弟姉妹ハ服三月 イロチヲトウケトフチニケツノハ其の親の服と云々
 ○姑 ハ其の親の服と云々
 ○伯父 ハ其の親の服と云々
 ○遠母ハ服三月 トウモトハ其の親の服と云々
 ○伯父 ハ其の親の服と云々
 ○姑 ハ其の親の服と云々
 ○兄弟姉妹ハ服三月 イロチヲトウケトフチニケツノハ其の親の服と云々

○ヲトコノチハ丈父母此服之月四十五日○ツ妻此服之月四十五日

○シカチ妾此服之月四十五日○コカシラ嫡孫此服之月四十五日

○ソシヨコ庶孫の服七日四十五日○コメ子婦之月四十五日

服之

○ヲホヲホチヲホハ二等親○ウサ日先祖父母此服之月四十五日○ウサ日伯父

婦服之月四十五日○イトコ従父兄分イトコ従父姉妹此

服七日四十五日○ユキアヒヲト舅父兄分イトコ姉妹服之月四十五日

○ヲトコノチハ丈祖母服之月四十五日○マシチ継父の服之月四十五日

○ヲトコノチハ同日^前丈妻妾服之月四十五日

○シイヨメ姪婦服之月四十五日

○トラツシヤ二等親○ウサ日祖父母我々祖父母の服之月四十五日

○ヲトコノチハ丈祖父我々祖父の服之月四十五日○ヲトコノチハ丈祖母我々祖母の服之月四十五日

○ヲトコノチハ丈兄弟我々兄弟の服之月四十五日○ヲトコノチハ丈兄弟我々兄弟の服之月四十五日

○イトコ再長兄分イトコ姉妹服之月四十五日○ハカチノチハ外祖母ハカチノチハ外祖母の服之月四十五日

○ウサ日我女父母之月四十五日○ウサ日白舅姨此服之月四十五日

○ウサ日兄弟ウサ日兄弟孫服之月四十五日○ウサ日従父之月四十五日

我伯叔父の孫之 眼 ○甥 我姉妹の男子 ○外甥 我姉妹の女子

○弟孫 我孫の男 ○孫婦 我孫の妻

○書姪 書生の子 ○書姪前子 書生の前子

五等親 ○書姪父母 我姉の父母 ○姪子 我父の姉妹

○舅子 我母の兄弟の子 ○姨子 我母の姉妹の子

○玄孫 我孫の子 外孫 我孫の子 孫 我孫の子

凡男女子七歳までは親のくまの子のくまも眼

くまは年上はたぬ眼あり 母の死より

利不ろくは死後にもくま痛眼しるる くまは年上はたぬ眼あり

凡人は死後十日 葬の日より

くまは年上はたぬ眼あり くまは年上はたぬ眼あり

▲濃家の人死す

る時此のけくれう〜標列うれれ門ひよめよお入すゆしに
けくれう〜▲ソラとさきてお赤く〜と〜しりく〜三十九れ
けくれぬお眼い〜海の隈して〜いまり〜とさ
けすら〜と〜化と〜し〜▲を眼抱眼く〜別火之けけ火
のくお合火すれ〜お昔のらみ〜死穢あま〜と〜おのし〜
形〜し〜▲神事の家〜り〜お〜る食処と眼を〜し〜
〜ら〜るお〜し〜の家お右の火成用お〜し〜次二夜三日は穢
めて用お▲死穢を混せぬ眼を〜し〜を胎を〜し〜所あ〜人
し〜し〜合火すれ〜し〜神〜の家申〜お昔し〜▲死穢を混
せぬ眼列火けけ神〜の家の下人お入すり〜る

○改葬の忌母日

女房月水れ穢七日

元七のさ〜日〜り〜同在日火〜り〜
赤その女房〜し〜るさ〜して〜る〜社系

〜し〜る〜▲神事御系祓の時〜るの家と〜次下

但し婦人並親類七氣未返れ乳人〜し〜標列し〜し〜
別火すれ〜し〜れ〜し〜▲又月水の女房の別火す
ぬ〜神〜し〜御系祓の家の下人お入すり〜し〜り〜か〜次
▲神事海敷の時月水の女房お入すり〜し〜神〜し〜れ〜時〜り

○傷胎の忌母日

同〜し〜三轉さ

○俗よ小産と〜し〜三月のちけ〜れ次月水
の〜し〜に月〜存け〜る〜し〜し〜死穢よ

○人れ産穢時

但し言ひ接し西の轉〜し〜故よ〜し〜ら
お入同在日火の〜し〜夜〜ら〜る〜し〜
お〜ら〜す〜し〜る〜お〜産の〜し〜と〜産あ〜し〜形のけ〜れ〜し〜
〜し〜る〜し〜七日のけ〜れ〜し〜と〜し〜ら〜る〜し〜

○丑體不臭の穢

凡人の〜し〜は〜是の〜し〜と〜ら〜る〜し〜の〜し〜
〜し〜る〜し〜の〜し〜と〜ら〜る〜し〜七日のけ〜れ〜し〜ら〜る〜し〜

の儀之合火の人又合火十人二十日引む是西の儀之○或云
八人十麻六日十日十麻七十日引む。同火人良り七ヶ日食
おひりて十日十日。同食するは十日を麻六日十日引む
○或云生完ハ十日引む十完ハ九十日引む

▲麻丸も別の茶経と引ひしれハ七十日引む只麻ハ十日
九十日引む七十日引む麻草のへくる茶と七日引む麻角
の入りより古き角より七日引むと引む所自余れ

茶是ふ唯しておひりて引む▲神のよみ膠ととれ
しり大いむへちあもをさるる

○五辛と食するはけい十日の浪るや但香のうせる時
マセをさるるや今まの浪る

○此と切て 神淨 くる 次血つる時らむ

○人と殺害する人 当日引む ▲すえ此のハ三十日のけりれ
くびと切カハ三十日引れ

▲くとしら次時の終國のう家の申してくせ共終國
の人ハ三十日引れ之野射してくせそれとらふ

▲このさうりけりけりれけいハ当日引む
▲くびと切時の縄を引れ切とひこく縄とえ

▲さへ引れ引おろくえさへ引けり
▲まおいの人血のあつじじまおいと早くまらむ

○篠布よりこれま心 心の封とつてむふの儀
りて引て引けりけりけりけりけりけりけり

○篠布より女室物 女室物とせりやうりてかよます
まらけりけり

○凡月ツキのらまはしめおろく別所ハ前夜より数日
一々日此朝水とす

○凡神社のゴニヤ前少て必次下馬下興す一但さる
の時ハ申中のに候て要所より一カ一

○凡縁の中より大神宮下流神社一伝友とす
すもまはけられぬ前の人とす

○凡日神おのすハ縁の内と申中念すもハ
くまカ比神比命ヒノカミ在境比と定らる
より淨穢のへたておえ天上の神カミハ淨穢
みてもふよりて縁ワタリとす
私由日神のヒノカミは流るる今時イマトキ合流也

日神のひかりのまはるるすむは候也

○凡十月と神を月とて一社社一まはぬはあり
うり神カミハあまの大神一集りあひてあまとい
るハ不説フセツるもこの神を月とて流るる
るり世俗のまのたふしよあら候いと
社ヤシロハ流神カミ一由次之社系流るる
めねとす

○凡公ウケ安カれ井乃ろと縁ありとむる井首
るまはけられず井首イノハ縁ありとむる
けられ

○神を海取の時呼道并ホツキノヒト子後起人チヤウ立聴キ能ノ衆
秋すく一赤月アカツキの女房メノハ台あり別を

お次巻一

右ノ不月経使めをさししてさるるは一とちげさ
及びはくし一かし一或又智合なる事此様
ありとしも宗源の非月ありぬる事
○ ワケニセリナイントコノウキニ 初巻抄内付所方に

中と次巻一つとちこれのうぬとんよせさ
おらぶかきぬれ

○ 詩經より白圭之は尚可磨也此言之は不可為也とあり
其さへ白圭とさく天下の富有りむれおけ換

したかにもつくらいりぬぬれともさし
はくらふはつくらぬぬれ一け一ちのちけ換
たりしはさしきさすし一あさしきさ
りしはさしきさすし一あさしきさ

○ 綱目大ツナリ此大ツナリ以テアハハリユレヘラスル
ナリ

△ 君臣ノ綱父子ノ綱丈夫妻ノ綱トテ此ノニウカ
人門ノ父ガ子ユエニ綱ト唱フ

○ セツトウヌスルノ 穴竊盗トハ次ルヌスミフル人ト云強盜ハカメキ前
ヲ押破テ入人ト云

一乳ヲ留ルニ大、麦ノモヤシイリ末ニシテ
湯ニテ服ス

黒ナマスリ治ル茶

合磁 呉茱萸 經粉

右三味等分末シテスイ地草ノ汁ニテトキ
湯上ニ付テ煮之ハラクヲキヲトス幾度モ
スルナリ

白ナマスノ茶

肉桂 芍薬 經粉 イワウ

右四味末シ子ブカノ白根ヲ五六本辛一束ニ
切具切口ニ粉茶ヲヌリテスリツクル也
妙茶ナリ

湯火傷ニ妙ノ祝由科アリ

其呪ニ曰

サルサハノ。池ノハマダラ。蛇^ミカマケタ。ア^カカ

王子ノ子孫ナシ。ウムナタシナ。アトツクナ。布^フ留^ル

部由良由良

右ニ及唱痛前梅シ即治。

ウタガウヘ
カウス

替星之事

- 一 昔天子^{あとき}を^{ホフキ}た^{ハシ}に^ハ王候^ハ破^テて^ハ天子^{ヘイカク}兵革^ヲ止^メし^セん
- 一 亦^ハ此^ノ賊^ト故^シて^ハ心^ヲあ^ラし^メん
- 一 其^ノ方^ニ是^レに^ハ也^ノ害^トす^ル
- 一 白^ク之^レに^ハ将^軍叛^テて^ハ二^年ふ^ハ兵^ヲ止^メら^ズす^ル
- 一 是^レに^ハ水^ノ極^ニて^ハ海^ニ溢^リて^ハ穀^ヲ食^ハす^ル
- 一 根ノ実 トゲヌキ也^トイ^フク^ニ
- 一 又ハ^ハ名^ヲヤ^キコ^シテ^ハモ^ヨシ

一如神教

トゲヌキ妙茶也

系所名也^トイ^フク^ニ合^ビイ^トロ^ヤ有^リ

雷凍

後多^ク氷^ヲ流^シテ^ハ氷^ノ流^ル

水^ノ心^ヲ知^ル

水^ノ流^ル

氷^ノ流^ル

中ふくに

らむのふれ

きくね

大黒天

潮日伺いたし又七夜ん

○けししみのふれゆとし
うさたふ美のふれまに
おんま

○ふれし園法象はるる

○おんまらまらふれ

袖保の法

袖の突とかし様とまらふれ
くたききかしおんま
うかきとらしおんま
おんまらまらふれ
つり日たあふれ

あつたての

但し、
...

葛布板方

...
...
...
...
...

...

一 七板方...
...
...
...
...

金を能く洗ひて大所への是はしめ
うほ所の髪を脱胎した中移るは
うほ所の髪を脱胎した中移るは
はらぬと云



又能く洗う物ゆへに髪とらひからしめ
しりしを洗上りしをゆへに髪とらひからしめ
五丁上りしをゆへに髪とらひからしめ
い草のちんと髪を脱胎した中移るは

あまら

一たび髪を洗うと云ふは髪を洗ふは
髪を洗うは髪を洗ふは髪を洗ふは
髪を洗うは髪を洗ふは髪を洗ふは
髪を洗うは髪を洗ふは髪を洗ふは



かけ髪は髪を洗うは髪を洗ふは
かけ髪は髪を洗うは髪を洗ふは
かけ髪は髪を洗うは髪を洗ふは
かけ髪は髪を洗うは髪を洗ふは

一 此の糸のつらきものを麻の糸に織し比おき其の
に又此の糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の
糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の
糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の
糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の

一 常此の糸のつらきものを麻の糸に織し比おき其の
糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の



此の糸のつらきものを麻の糸に織し比おき其の
糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の

一 此の糸のつらきものを麻の糸に織し比おき其の
糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の

此の糸のつらきものを麻の糸に織し比おき其の

頭痛治スル念昆羅神呪靈法

頭痛枚多ありしともしたし内よりしとくはらわす
法籍してし治せんといふとす

一 高申比七月申の日申ノ方西南ホもひて邪しき
すり所()の痛みのつらきものを麻の糸に織し比おき其の
糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の糸を織し比おき其の

神呪

俱毘羅神現頭痛鬼出急々如律令

そきて後よりくらりぬりくらりすらすら
のそこ灸て火はくもぐらり出て耳いぬ痛れ
いしうく者の灸灸てくく右に申のく
にかきりかのをくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

活きぬはく

ふふぬまれふふぬまかろいて

ちりくはらゆる香のくくく

忠遠れお茶

○ 杉 杉カに 杉カに 杉カに 杉カに
杉カに 杉カに 杉カに 杉カに

○ 胡椒 胡椒カに 胡椒カに 胡椒カに 胡椒カに
胡椒カに 胡椒カに 胡椒カに 胡椒カに

○ 山椒 山椒カに 山椒カに 山椒カに 山椒カに
山椒カに 山椒カに 山椒カに 山椒カに

右二味者のくくくくくくくくくく

△五味解毒

木通 忍冬 川芎 大黃 右等分

土茯苓 右四味一帖ニシテ一帖ノ量ヲホト
入合ニテ水煎シテ服ス

枳石出入説

田人曰
△立夏の後庚子ある日と入物と〜芒種の後壬子
ある日と出物と成

神極に曰
△芒種の後丙に午の日と入物と〜小暑の後庚子
ある日と出物と成

碎金曰
△芒種の後壬に午の日と入物と〜夏至の後庚子
ある日と出物と成

李時珍曰
△芒種の後壬にあつた日と入物と〜小暑の後庚子
ある日と出物と成

之に曰
△芒種の後丙の日にあつた日と入物と成是れ從是
ち〜小暑の後庚子と成是れ從是れ

一古一田ヲハカレニモツツラ町ト云位田職田モ幾町
 トツモリテ給ハル近世百十年前六百貫千貫
 トアリイツレノコロヨリハニマルト云事ヲ知ラズ
 或么今ノ見米五斗石ノ地ヲ十貫トツセルト又一説
 ニ六千石ノ揚ケ百貫ト云トイヘリ大塚具通ノコト
 ナルヘシソノ後ハモツハラ石ヲ以テツモリテ今ヲニ
 イタリテコレニヨル
 一弘仁式云上田二段地子十束中田一段八束下
 田一段六束下田一段二束

此戒不入呪

庚申日何ラトモき縁と縁カ自ヌレ
 命を金命奉しては呪をこゝに厄に之
 厄を四ツの方からたてて呪を極よふなり
 とらう後此の戒入なり
 呪
 コシゴウニイゴウニゴウニゴウニ
 マイドリクソワカ

形像をいふは也然るに成るるは火
十の字に火符にてある。陽爻は九
龍宮に在る所を也。此の如く
亦彼の如く馬と名づくるは此の如
也

一 所は也然るに本始月火より
を也。四波中二よりなる事なり
是れ之より。此の如く。十有
て。此の如く。此の如く。此の如く
此の如く。此の如く。此の如く。此の如く

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く
此の如く。此の如く。此の如く。此の如く
此の如く。此の如く。此の如く。此の如く

此の如く。此の如く。此の如く。此の如く
此の如く。此の如く。此の如く。此の如く
此の如く。此の如く。此の如く。此の如く

一 此の如く。此の如く。此の如く。此の如く
此の如く。此の如く。此の如く。此の如く
此の如く。此の如く。此の如く。此の如く
此の如く。此の如く。此の如く。此の如く

一 杉木の皮を名姓にせしむる系を
おろしめし内庭を納めしむる
理の如くしむるは違わぬ果は
山のどくしむるは口は
入るるもちしむるは

年月日

新書ありし十四言六時上
物に佛の如く種は
一 一書も物に所は上る諸六所

中條記の信元法所并之降
此五條の事

此を氣遣はしむるは
一 一書も物に所は上る諸六所

一 一書も物に所は上る諸六所
一 一書も物に所は上る諸六所
一 一書も物に所は上る諸六所

十

年

永

年

中

系

内

十

一

年

年

年

年

十

年

身不相因波子振云云云
於中難見中出天意什如
中云云云云云云云云云
本和宗律云云揚和之波
人救上渡云云波個海云云
繫宗重中云云亦救海云云
在善訓法施云云云云云

利之石火年能心亦救及復籍
為因得波云云云云云
去村九助中者法施云云異五人
云云云云人亦云云云云云
石州市船云云律制年未云云
宗以因十日云云云云云
教在是也得云云云後何云云云

中後石於... 物以爲... 右打... 及云... 波地... 爲... 右打... 及云... 波地... 爲...

家... 一...

壬午...

松平...

冬玉の日

文彦を

きんかんを

尾大を

鷹 恒鷹

右字糸針てくれるんや

又たし世にちとて

うふはれは

天下ノ政ヲスルニ五土ヲマツルヲ國政也

。中方ノ土ヲ黄^キナル紙ニ包

東方ノ土ヲ青^{アヲキ}ナル紙ニ包

南方ノ土ヲ赤^{アカ}ナル紙ニ包

西方ノ土ヲ白^{シロ}ナル紙ニ包

北方ノ土ヲ黑^{クロ}ナル紙ニ包

右ニ列ニシテ壇ヲツキテ上天子ヨリ下ノ民ニ

イタスルマニ是ヲアカメ奉^{ホウ}テ一^{ヒト}方ヨリ一寸ヲ

四方如是トシテ社壇封スルナリ國司知行

ノ地ニイタリテ社ヲタテ、地ニ封^{ムス}テ祭禮

ヲコタルナリ

夏^{ナツ}ノ年ハ月^{ツキ}ノ十^{トウ}日^{ニチ}ノ十^{トウ}字^ジノ七^{シチ}日^{ニチ}ハ

ハノ殺

沖^{ウチ}界^{カイ}進^{シン}所^{ショ}位^イ階^カ也

上治をせりしに

大政を信

とて

御

心

我れもせば人と

と信じて

一玉^{ツク}碎^{イナキ}テモ其^{ツク}白^{イナキ}ヲ改メス竹ハ焚^{ツク}テモ

其^{ツク}節^{イナキ}ヲ毀^{ツク}ハス

一^{ツク}夫^{イナキ}恨^{ツク}ヲ啣^{イナキ}ハ六月霜ヲ下^{ツク}シ一婦^{ツク}怨^{イナキ}ヲ

懷^{ツク}ハ三年雨ヲウス

一^{ツク}くのち^{イナキ}ん^{ツク}て^{イナキ}も^{ツク}患^{イナキ}は^{ツク}か^{イナキ}り^{ツク}ま^{ツク}きた^{ツク}と^{ツク}り^{ツク}所

一^{ツク}くのち^{イナキ}ん^{ツク}て^{イナキ}も^{ツク}患^{イナキ}は^{ツク}か^{イナキ}り^{ツク}ま^{ツク}きた^{ツク}と^{ツク}り^{ツク}所
一^{ツク}と^{ツク}の^{ツク}ち^{ツク}ん^{ツク}て^{ツク}も^{ツク}患^{ツク}は^{ツク}か^{ツク}り^{ツク}ま^{ツク}きた^{ツク}と^{ツク}り^{ツク}所
一^{ツク}と^{ツク}の^{ツク}ち^{ツク}ん^{ツク}て^{ツク}も^{ツク}患^{ツク}は^{ツク}か^{ツク}り^{ツク}ま^{ツク}きた^{ツク}と^{ツク}り^{ツク}所
一^{ツク}と^{ツク}の^{ツク}ち^{ツク}ん^{ツク}て^{ツク}も^{ツク}患^{ツク}は^{ツク}か^{ツク}り^{ツク}ま^{ツク}きた^{ツク}と^{ツク}り^{ツク}所

次尾のりるもはる新謂之此は神也
力は能測るべき事なり

少細去るなり

とらへしは船を中久留に

和服海より天に海は

七重なるもの一ふり

能方感流所流し

多あり

しをきりて

六年能成る

と

葛葉し

感心は

し



Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, written vertically on the left page. The text is contained within a rectangular border of red diagonal lines. The characters are dark ink on aged, yellowish paper. The text is arranged in several columns, with some characters appearing to be part of a larger, possibly obscured, text block.

Right page of the manuscript, mostly blank with significant water damage and staining. A small red circular stamp is visible in the upper right corner. A dark, irregular smudge is present near the center of the page.



